

43) ワグネルと島津源蔵

Relationship between Dr. G. Wagner and
Genzo Shimazu

大垣女子短期大学 下総 高次

Takaji Shimoosa, Ogaki Women's College

ワグネルは1831年ドイツに生れた。明治元年(1868)に来日し、明治3年佐賀藩の招きにより有田陶業の改良に従事。日本ではじめての石炭燃料での焼成を試み、西洋の釉薬・顔料による技術を指導した。明治4年、大学東校および南校にて理化学を講義。明治6年(1873)、オーストリアで開催されたウィーン万国博覧会に、日本政府事務局顧問として、70余名の随員と共に出席し、多くの成果を挙げて帰国した。明治7年勸業寮の設置に伴い顧問となり、各種品物の製作、種々の技芸の教導、七宝焼の研究を行った。他方、東京開成学校、文部省製作学校の教師となり、明治9年(1876)には、米国フィラデルフィアにおける万国博覧会に出席し、成果を挙げた。

明治11年(1878)京都府に招かれ、京都医学校において理化学を講義した。また「京都舎密局」において、化学工芸品の製作指導、陶磁器の新製作法、七宝瑱瑯の着色法、石ケンの製造法、写真術の実験、指導に従事した。

明治14年(1881)東京大学応用化学教授となり、釉薬と陶磁器の素地との関係进行研究し、釉薬にヒビの出ない旭焼(元 吾妻焼)を創成した。また、日本工業の実務教育に必要な東京職工学校の設立に努力し、これが実現した。明治17年(1884)同職工学校に陶器・玻璃工科の設置と共に、その主任となり、自ら教導に従事した。これは、現在の東京工業大学窯業科の濫觴である。

明治23年(1890)9月、賜暇によりドイツに帰国し、明治25年(1892)1月再び来朝して、勅任官の待遇を得て授業を継続した。

明治25年(1892)11月、東京駿河台の自宅で逝去、特旨をもって勲3等に叙せられた。

島津源蔵(初代)は、天保10年(1839)京都に生れた。明治8年(1875)3月、「京都舎密局」

のごく近くに、「理化学器械」を中心とする鉄工業を創業した。

「京都舎密局」は、明治3年(1870)に創設された官制の勸業、教育施設であって、「大阪舎密局」、「東京の工部省」と共に、当時、わが国の最新科学、技術導入の拠点であった。

ワグネルが「京都舎密局」に招かれるや、源蔵は、これを好機として、この舎密局に出入りして現化学器械の修理を担当し、ワグネルの指導を仰いだ。そして、新しい舎密窮理に基づく西欧の器具に対し、熱烈な愛着と研究的執念を燃し、新しい器械の製作に絶ゆまぬ努力を傾倒し続けた。明治27年(1894)12月8日、享年56歳で死去した。

島津梅次郎(後の2代目源蔵)は父源蔵と共にワグネルの感化を受けた。16歳の時(明治17年、1884)にウイムジャースト感応起電機を完成し、明治18年京都勸業博覧会に出品し、時の文部大臣森有礼の賞讃・激励を受けた。これは「島津の電気」の名で、学校の理科教育用静電気実験機械として、幾10年間も重用された。明治28年(1895)5月、初代源蔵の念願であった「標本部」を新設し、人体の生理構造、動植物の生態について視学教育の新分野を開いた。

明治29年(1896)、最初のエックス線写真の撮影に成功した。これは、ドイツのレントゲンがエックス線を発見した明治28年(1895)11月から、わずか10ヶ月後のことで、日本における学問的一偉業であった。これはやがて、日本最初である島津のレントゲン機械装置の完成に直結するのである。また、日本海軍の艦艇に設置する無線機に必要な蓄電池を完成したことも特筆すべきであって、日露戦争に際し、日本海におけるバルチック艦隊発見を報じたのも、この電池を用いた無線機であった。以上、ワグネルは、わが国の新しい文化の揺籃時代において、25年の長い間にわたって、日本の教育・産業の開発達成に身をもって盡力した。また、「京都舎密局」が機縁となって、ワグネルと奇しき出会いをした「島津源蔵」父子は、文明開化、殖産興業の時運に乗って活躍し、今日における「島津製作所」の輝かしい礎力をきぎづいたのであった。